

学 位 論 文 題 名

超越論的虚構－社会理論と現象学

学位論文内容の要旨

本論文の目的は、社会についての理論が現在いかなる条件の下で成立しうるかについて、その試みが抱え込む固有の困難をそのつど検討しながら考察することにある。そのために本論文は社会理論のモデルを、人間科学のうちにまずもって求める。しかしながら、人間科学の認識論的基礎を提供するフッサール現象学の批判的検討を通じて本論文は、人間科学そのものを規定する理性のあり方を明確化し、その認識論的考察を遂行することになる。その結果本論文は、理論の虚構的性格とその積極的な可能性について著者独自の見解を示すに至っている。

第一章においては、人間科学の批判的再構成を意図するフッサールの記述を最大限利用することにより、社会理論にかんする一つのモデルを具体的に規定する。現象学は、事実の連関に差し戻された経験的主観性の背後に、そうした主観性を支える超越論的な主観性、すなわち意識の志向性の次元を設定する。現象学は、反省の対象である主観性を事実化するのではなく、それをつらぬく目的志向、それを対象として成立させる理性の基礎付け連関を発見し、経験的事実を志向性の全体的構成のうちで理解しようとする。その志向性の次元は、事実を構成する主観性という意味で超越論的主観性と呼ばれる。その志向性の連関は、意味の連関、すなわち論理的連関として表現へともちきたらされる。ここで人間の志向性は、特定の歴史的・社会的な状況に条件付けられており、そしてその社会的状況は人間の志向性自身が構成したものである。とすれば、その状況自体もまた、超越論的な意味での志向性、歴史的・社会的な志向性として説明されなければならない。ここでひとたび社会理論は、現象学そのものによって定義されることになる。

ところが、社会理論を単純に超越論的現象学によって定義する立場は、第二章において直ちに批判を受けることになる。というのも、志向性を外側から規定する歴史や社会、すなわち人間の一超越論的意味での一〈外部〉環境についての超越論的認識は、その反省的認識それ自身の権利根拠を危ういものにするからである。現象学は自己の志向性を反省的に認識するにあたって、それを条件付ける歴史的・社会的な志向性にまで遡ることになる。ところがこの歴史性・社会性に対する本質認識は、その認識それ自身を可能にした歴史性と社会性をふたたび前提とする。とすれば、現象学が獲得する本質認識はその〈外部〉によってつねにみずからの権利根拠を脅かされることになる。にもかかわらず現象学が自ら獲得した様々な本質形相を歴史と社会についての最終的な真理として主張するとすれば、それは誤謬の烙印を押されることになる。こうした論点を軸として、ルカーチや、フランクフルト学派に属するホルクハイマーやハバーマスといった理論家たちの反対論的立場との反照関係のうち

で、しかも超越論的現象学をその骨格において修正することなしに、社会理論としての現象学の可能性をその極限まで引き出すことが、第二章の目的である。

だがそのような方向性は、第三章においてより本質的で回避困難なアポリアに直面することになる。自己の志向性に対する反省的認識をささえるのは、記号とその意味の一致を主観性が保証するという図式である。対象の意味を私が知覚する、もしくは私がその意味を表現するというとき、その一致がつねに前提されている。だがそれを可能にしているのが認識の〈外部〉にあるとすれば、その一致は究極的には成就していないこととなる。とすれば、本質を示すカテゴリーはすべて一致を偽る虚偽ということになろう。その原理的な不一致を強制的に同一化することが認識の前提となる以上、超越論的反省の立場は虚偽の反復を迫られていることになる。周知のようにデリダは、フッサールのこの局面に執拗に固執し、一致にかんする時間的差異と意味の文脈的分裂を示し、超越論のカテゴリーを埋め合わせの連関として示した。またベンヤミンはさらにすすんで、言語をアレゴリーと見る観点から、事物や言語記号の背後にそれを構成した志向性を想定する立場を拒絶する。アドルノもまた言語を交換過程における商品と同一視する立場から、記号と意味内容との対応関係を不正な社会的過程によって強制される誤った同一性であることを示す。ここで、意味志向が記号のうちに固定され、その記号を通じて意味が同一なものとして構成されるという図式は、意味（作用）—記号—意味作用という連関で示される。しかしながら、知覚において同定される同一者の措定が、そこに浸透する社会的物質性の次元のゆえに、つねにすでに失敗であり、したがって同一性の否定であるとするれば、記号はその成立の時点ですでに欠陥を抱え込んでいることになる。現実と志向性との一義的な関係が切断されているということは、現象学がその方法的前提としていた、言語記号とその意味、それを支える志向性の一致をもはや頼みとすることができないということを示している。以上のような根本的批判に対して本論文は、記号と意味作用の原理的な不一致を強制的に同一化するという虚偽によって生じるカテゴリーを超越論的虚構と定義する。

さらに第四章において、以上のように定義された超越論的虚構が現実の社会的解明の現場でどのように具体的に展開されているのかが、ウェーバーの理解社会学とその認識論的基礎付けを現象学の立場からなしたシュッツの現象学的社会学のうちに究明される。これに対してフーコーは、現象学に基礎づけられる人間科学の認識論的構造それ自体の神話的性格を根底的に批判し、これに代わるものとして、構造主義を基礎づける言説分析の戦略を提示した。本論文は、こうしたフーコーの戦略をも神話的性格を帯びうることを指摘しつつ、理解社会学と構造主義の両者を構成するカテゴリーとして超越論的虚構を位置づける。そのうえで、そうした虚構の規定が社会的現実性に具体的な規定を与え、それを構成することが、メルロ＝ポンティの主客循環・転換可能性の着想を援用しつつ示される。

また第五章においては、フッサール現象学の基本的な作業図式が、個別を通じて全体へと至る反省的判断力の作用にあることがしめされる。そしてアレントの記述にひとまずよりながら、この反省的判断力が、全体主義を特徴づける規定的判断力のイデオロギーと、全体性をはじめから拒否し複数性の立場に立つ公共性の概念の双方との緊張関係のうちで機能することを示す。それはまた、あらわれの次元を持たない物質的生活過程と、それを全面的に排除することによってはじめて純粋なものとし

て成立する公共性の空間とを媒介するものでもある。本論文はその媒介の次元を〈社会的公共性〉と定義することにより、社会的リアリティとその規定の論理的同時性について最終的な考察を行う。超越論的虚構によって構成される理論は、その複数の存立可能性によって、公共性の次元を社会的空間の内部に創設しつつ、しかもそれを通じて社会的現実の複眼的な構成を可能にする。そしてその複数性こそが、解明の対象となる公共空間に現実性を与えるのである。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 高 幣 秀 和

副 査 教 授 中 戸 川 孝 治

副 査 助 教 授 石 原 孝 二

副 査 教 授 加 藤 精 司（北海道浅井学園大学）

学 位 論 文 題 名

超越論的虚構－社会理論と現象学

本論文の主題は、社会理論についての超越論的考察を現象学の立場から遂行することにより、社会と人間についての理論に一定の認識論的基礎を与えるとともに、その臨界を示すことにある。そのために本論文は、フッサールの超越論的現象学を基軸として、現代哲学の様々な理論的潮流による媒介を経ながら、社会についての理論が現在どのような資格において存立しうるかについて著者独自の見解を示すに至っている。

本論文は第一章において、それ自身理解不能となった事実の連鎖を合理的に理解する権利根拠をフッサール現象学に基づいて構築する。それは機械のように自動的に展開する事実連関を意味連関のうちに把握する直観を条件とするものであり、その直観によってすべての認識が可能となるがゆえにその権利根拠は必然的であると主張される。だが意味連関による合理的理解（超越論的反省）の可能性は、その意味連関それ自体がすでに深く機械化しそのうちに事実性の要素を包含しているがゆえに挫折せざるを得ない。しかしながら本論文は第二章において、フランクフルト学派やルカーチの議論を用いながら、合理的理解のその不断の挫折こそが、その理解それ自体を可能にしている客観的・物質的条件を社会的なものとして示す条件を形成するという。したがって超越論的条件としての社会を表現するカテゴリーはすべて事實的・物質的性格を帯びており、それ自体さらなる解明を要求する批判的本質概念であるという。また第三章においては、このようなカテゴリーの物質的性格が、事実と意味との知覚による同一化的把握を原理的に不可能とすること、にもかかわらずその同一性が認識の前提とされているがゆえに、社会的認識の成果として析出されるカテゴリーはすべて虚構的性格を帯びてい

ることが示される。そのうえで本論文は第四章において、現実には展開されている理解社会学、および精神分析や文化人類学の認識成果の虚構的性格を詳細な議論によって指摘し、その認識の限界、その限界を超越する際の危険について指摘する。その上で本論文は、そのような虚構的性格を帯びたカテゴリーがその虚構性のゆえに認識を不可能とするのではなく、むしろ社会理論というかたちで遂行される認識がそうした虚構性それ自体によって積極的に可能となっていることを、メルロ＝ポンティの議論を援用しつつ示すことになる。虚構的性格を帯びた規定性によって、むしろ社会的現実なるものの次元が構成されているのである。最後に第五章は主にアレントの議論によりながら、社会的なものについての超越論的规定はその虚構的性格のゆえに別の規定の可能性を、ひいては別の理論の可能性を豊かに生み出すこと、しかもそうした理論としての複数の他者の視点によってみずからの一面性をつねに補完され、批判されることを示す。その相互の緊張を保った競合関係が社会的なものの規定をめぐる理論的な公共性の空間を構成し、その空間のうちではじめて、それ自体は現象することない不可視の他者の次元を可視化することが可能となる、と主張される。

現象学はその超越論的自己反省の臨界において、自己同一性要求を解体させることによって、社会理論の本源的に反・一義的な性格、すなわち社会理論における超越論的虚構の次元を明らかにする、ここに構想される複数性の現象学こそが社会的公共性の空間を基礎づけるとともに、全体論的社会理論の独断的暴力からの脱却を可能とするという本論文の主旨は、刺激的であるばかりでなく、十分に説得的でもあり得ている。こうした認定の上でなお、いくつかの論点をあげるとすれば、フッサール現象学の解釈において、フッサールその人の哲学とその方法的展開とを厳密に区別すべきとする議論はありえようし、またベンヤミン、アドルノ、フーコー等のそれぞれについて、より立ち入った論述を求める立場もあろう。さらにまた、社会的実在性の次元における矛盾、批判といった局面への分節化が必ずしも明瞭ではないという指摘も可能である。しかし、これらはいずれも、社会理論の認識論的基礎を究明するという本論文の一貫した意図から生じる然るべき結果として了解されるところであり、事実また自然と社会にわたる具体的経験に基づく批判モデルの構成作業は、本論文の著者の次なる課題としてすでに開始されている。

本論文はこうして、フッサール現象学を起点とした社会理論への周到なる認識論的序説として、独

自の完結した意義を持つと考えられる。浩瀚な論述のうちに連結された斬新な論点は、今後の研究状況のなかで少なからぬ反響を招来するであろうことが期待される。以上の評価に基づき、本審査委員会は全員一致して、本論文の著者古賀徹氏に博士（文学）の学位を授与することがふさわしいとの結論に達した。